
スキンシップとキミへの想い

紺青

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スキップとキミへの想い

【Nコード】

N3431L

【作者名】

紺青

【あらすじ】

同じ会社に勤める澤村と南。
部署は違えど付き合い始めて早数年。
世間体もあり一緒に住んだりはしていないが
週末はお互いの自宅を行き来する仲に。

今回のテーマは「いちゃってる」です。

(前書き)

この作品にはB L要素が含まれます。

B Lの意味がわからない方、ご理解のない方は閲覧をおやめ下さい。

部屋に入るとソファアにどっかりと腰を下ろす。

「澤村、今日寒かったなあ。」

先に帰宅していた南が当然のように擦り寄ってくる。

「ずっと室内にいたんだから、別に寒くもなかったろうが。」

「ま、な…だけど寒いと暖房だって効かないんだぜ。今も寒い…なあ、澤村。」

「じゃれるな、先に風呂でも入って来い。」

南をぐっとおしのけて立ち上がる。

「うう…最近、冷たいぞ。」

「冷たくないだろうが。十分優しく接してやってるだろ。」

「愛の確認作業の時は最高に優しいよ。」

そうじゃなくて、日ごろのスキンシップとか…してくれないじゃんか。」

南がぷーっとふくれっ面をしてソファアに寝転がる。

「いつもいつもスキンシップばかりしてたら、大事な時に…嬉しくないだろうが。」

「普段から触れて欲しいんだよ、俺は。」

そう言いながら顔をソファアに完全にうずめてしまった。

「会社では絶対にしらない。もし関係がばれたらどうすんだ。」

「いっつも誰かの顔色伺ってさ。誰もそんなこと気にしないのに…。」

南は顔を伏せたままだ。

こうなったら絶対に俺が折れないといつも仲直り出来ないのだ。

頑固者、と自負しているが絶対にこいつの方が頑固だ。

「社内で確実に誰も来なかったら触ってやるよ。それでいいだろ。」

「本当かよ?」

いぶかしげに目だけこちらに向けてジッと見つめてくる。

「確實じゃなかったら触らないからな。」

「わかったーっ。」

にぱーっと笑うというのはこういうのだろう。

完全に、にやけた顔の南が背中中のしかかってきた。

「スキンシップー。」

「…重い。」

「スキンシップー。」

「わかったから、どけろ。」

「スキンシップー。」

「ったく！」

スキンシップを連呼する南を背に背負って俺はベッドに移動する。

「澤村のえっち♪」

「夜の営みもスキンシップだろ。」

澤村は考え方が堅いというも思う。

最初は俺が無理に心をこじ開けてるんじゃないかと心配したくらいだ。

でも本当に嫌な時はどうして嫌かを順を追って話してくれる事が最近漸くわかった。

「な、澤村。次の休みっていつ？」

「今色々と立て込んでるからな…予定よりちよつとずれるかもな。」

「ずれたら一緒になるかなあ…。」

「どっか行きたいところでもあるのか？」

「映画が観たい。」

「恋愛映画は禁止です。」

この前、無理矢理一緒に行った映画は恋愛映画だった。

映画館は男女のカップルばかりで、自分たちが同性愛者ですと宣言しているみたいで

流石に落ち着かなかった。

「大丈夫、二人で行っても大丈夫なやつだから。なー行こうよ。」

「そーいや最近、DVDばっかだったな…。」

澤村が少し考えて非番が一緒なら連れて行ってやると俺の頭を撫でてくれる。

ちなみにえっちの途中の会話だ。

俺としては、澤村としかこういう経験はないし、

澤村だって男の相手は俺しかないはずだからつけなくたってかまわない。

俺に負担がかかると絶対にゴムをつけるのだ。

その間が何だか嫌だから澤村の体制が整うまで話しをすることになっている。

「南、お前いつもこの間によく喋るな。」

「う…。」

毎回それとなく話していたはずだったのに突然、澤村がそんな事を言う。

意外に勘が鋭いんだな、と苦笑してしまった。

「無理をして間を持たせなくてもいいと思うがな。」

「何か、嫌なんだ。澤村とフィルターを通さないと出来ないと思ったら…。」

「特別な時はしてないだろうが。」

苦笑しつつも澤村がいろんなところにキスしてくる。

「そうなんだけど…肝心なところが膜あるって思ったら、な。」

「そうか、じゃ外すわ。」

「いいっ!？」

澤村がせっかく着けたゴムを突然ぽいと捨てた。

「何だよ、嫌なのか？」

「そうじゃないけど…俺のお願いはいつも却下されてたから。」

「納得したんだよ、フィルター通してっつのに。お前にしちやいい表現だったな。」

澤村がにやっと笑って俺の中に入ってきた。

心の準備をしてなかったから入ってきた瞬間に力んでしまった。

「冗談だろっ…てえっ…。」

「…ゴムが嫌だって言ったのはおまえだ、我慢しろ…キツ…。」
入るとき相当痛い。それはもともとそこが受け入れるところじゃないからだ。

どっかの雑誌で読んだ。だから、澤村はゴムを着けるんだと語っていたのも思い出した。

俺に負担がかかるって言うのはこういうことか…と痛みが過ぎ去るのを待っていた。

「潤滑油の役割すんだよ、ゴムはっ…。」
「んうっ…。」

最初の衝撃をやり過ぐすと俺の目から涙が溢れていることに気付いた澤村が
目の辺りを舐めてくる。

「お前を傷つけたって絶対に気持ちよくなならないからな…おい、大丈夫か？」

「ん…ごめん、嫌だなんて言って。」

「いいさ、する前にちゃんと話してやらなかったしな。」

「…澤村…好き…。」

キスを繰り返すと気持ちよくなってくる。

濡れたりほしくないのだけど、澤村の体液が潤滑油の役目をしてくれているようだ。

「映画、楽しみだっ…。」

少しずつ動きながら、話しかけてくれる愛しい人の声を聞きながら俺は意識を手放した。

深夜、身体に触れる感触に目が開いた。

隣では南が俺に絡みつくように眠っていた。

「痛かっただろう…。」

思わず呟いて涙の痕を指でなぞる。

ゴムは確かにフィルターを通しての作業になる。

だが南の身体に無駄な負担を掛けるなんて俺には考えられないことだった。

気持ちをいちいち話さないと伝わらないというのは時として不愉快だ。

「悪かったな。」

「ん…。」

南は小さく身をよじって更に俺にしがみついて来る。

時々素直なこいつがうらやましい。何に対しても真っ直ぐでいつも梃子摺るが…。

「お前が好きだ。」

腕に絡みついた南の手を握ると目を閉じて俺も眠りについた。

（後書き）

どうも、初めまして紺青^{こんじょう}です。

普段は別の名前で18歳以上という指定付で連載をさせていただいています。

こちらで初のBL短編を書かせていただきました。

ガイドラインって難しいものですね、紙一重ですよねえ…

最後まで澤村と南にお付き合いいただきましてありがとうございます。
した。

もし感想などいただけたら私の狂喜乱舞をお見せ出来ます↑
ではまたあつまーくてぬっるーい短編でお逢いしましょう。

閲覧本当にありがとうございます、紺青でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3431/>

スキンシップとキミへの想い

2010年10月18日18時15分発行